

「きらいな花は多いけれど、とくに好きな花というものもない。まあ比較的きらいでない花にハナシヨウブある。」

これは当時、当代一流の園芸家が集まる会が発行する会誌に、寄稿された先生の文章である。ベテラン読者層を意識してか、先生のパラドックスが強烈的パンチで頬を襲う。

「戦時中卒業を前にして応召を受け、それまでに骨折って集めたたくさんさんの品種につらい別れをして、露営の夢に結んだハナシヨウブは、目のさめるほど鮮やかな藍色の八重咲だった。戦後復員すると早速ハナシヨウブを尋ねまわって、ようやく苗を手に入れ、初めて咲いた花は、今



平尾先生

なら真っ先に抜き捨てるような下品な花だったが、その時は実に天女がわが陋屋に舞い降りてくれたようなものだった。」

先生の文章は続く。「ハナシヨウブにはエドシヨウブ、イセシヨウブ、ヒゴシヨウブというのがある。というのが通説だが、私が勝手につけた呼び方にエドシヨウブというのがある。見ると気持ちが悪くなるという意味である。どうひいき目にみても美しくない。」

濃厚で穏やかな先生の、このような表現は稀有のことだ。相手が権威者だとこんな一面を見せることがある。さらに毒舌が続くが、先生の書かれた文章のほとんどすべてを読んでいる私にも、このようなものは

これだけのようだ。

ここで先生が語っているのは、園芸の原点は育種であり、求めるのは花の美という一点である。「真っ先に抜き捨てるような下品な花」とか「エドシヨウブ」とか、この毒舌に、花への美意識の凄まじさを感じてしまう。そ

の後、多くの植物を手掛けられるが、終生、美の求道者だった。

サクラソウの交配に手を染めたときも、現存する三百数十種を集め、ご自身の交配種を含めて五百株ほどの品種を並べていたが、どの鉢にもABCいずれかのラベルが挿してあり、聞いたところ、Aは優秀、Bは一作の要あり、Cは愚作で捨てますという返事で、Cの中に入手困難な古典種があるので捨てるのは惜しいと言うと、ご所望なら持っていくなさいと鉢ごと差し出された。ご自身の評価にはずれ、美意識に合わなければ、どんな名品でも稀少品種でも、さらに伝統にも世俗の評価にも少しの価値も認めないという行き方だった。

一方で大事な植物でも、欲しがるとすぐに分かち与えるという人で、これは一本しかないからと辞退すると、この温室の中にちゃんと遺伝子が残っているからと、平然としたものだった。東京に出る時は、持ちきれないほどの植物を持って、それがすべて未知の植物なのだが、〇〇君

に合いそうだななどいいながら、むしろ与えることに楽しみを持っていったようだ。後継者が現われれば何年も手掛けていた植物でも、惜しげもなくそっくりプレゼントした場面も何度か見た。

先生に選抜のコツをたずねたことがあったが、「私は駄作ばかりで名前を付けるのも恥ずかしく思っていますが、国の内外を問わず、よい品種を出されている方には、何処か深い教養を感じますし、作出された花には、作者の風貌を感じますね」というようなお答えで、愚問を発した私は、恥ずかしい思いをした。

お話をしていると、先生の知識の深さ広さは無限で、黙っていれば温かみのある笑顔で応対している先生だが、何かを語りだすと、知性に磨かれたお答えがすぐに返ってくる。科学者であるのに、特に歴史や芸術に詳しく、話は変幻自在に進んでいく。それが単なる知識でなく、先生の中で噛み砕かれ、独特の評価を与えられたものとして展開される。文章で自ら知識をひけらかすというようなことは、全くなかった。

私は若い頃から短歌に親しんだが、先生は折々こんな歌がありますよと、その辺りに散らばっている反古紙に



墓前にて

すらすらと書いて示してくれた。それが江戸時代の戯作者だったり明治の富豪だったり、聞いた事もない作者のものだった。

お付き合いが深くなるにつれて、平尾家の方々の交際も進み、この家の方々は私のような凡人の窺い知れぬ、異能の遺伝子を持っているように思えてきた。

先生の厳父は大正昭和の化粧品会社として、東のレート西のクラブと並び称されたレートクリムの平尾賛平商店の社長であり、令弟の平尾博さんは「シャボテン社」の後継者として、多くの著作で斯界の権威者

だった方で、私もご兄弟揃っての永いご交際をいただいた。

若くして亡くなった作曲家の平尾貴四郎氏の交響詩曲「つばさ」や「砧」は、尾高久高指揮の日本交響楽団（今のN響）の演奏で聴いたし、歌手で「瀬戸の花嫁」の作曲家で知られる平尾昌晃などの変り種もその系列に連なっている。

こんな遺伝子のためか、先生は音楽がお好きで、絶滅寸前の虚無僧尺八に打ち込んで正統の後継者であり、ハーモニカを奏でる名手だったり、クラシックではシベリウスに傾倒した。レコードを貸してくれて、返しに行くたびに「いかがでしたか？」と聞くので「神韻渺々ですね」などと答えると、「そうですね。これに比べるとベートーベンなんか軍楽隊だね」とご満悦だった。中学・高校以来の親友、渡辺暁雄氏の影響もあつただろうか。

植物では、先生は少年時代からサボテンがお好きで、戦前から伝わった「シャボテン」という雑誌を引き受けている苦心されていた。出版に関係していた私を相談相手にさせ、当時はエディターの扱いだったようだ。

先生に初めてお目にかかったのは

私が16歳くらいだったか、その頃の私はサボテンだけで、厩大なハナシヨウブの育種園も、さまざまな植物たちにも目が行かず、戦後まだ園芸植物の輸入が出来ない時代、先生のカタラスコレクションはまさにマニアにとっては夢の花園だった。

少し落着いて少しづつ他の植物にも目がいくようになって、先生の園芸家としての行き方を知るようになり、随分感化を受けた。

二十年も経つたらどうか、「育種は文化だ」などと先生の口真似をするようになったある日、わが家を訪れた先生が、どこから飛んできたか、芽生えたばかりの植物を大切にしていると、何故これを大切にするのですかと聞くので、どんな植物になるのか興味があるのでと答えると、いきなりそれを抜き捨てたのだ。さすがの私もムツとして、何をするんですかと詰寄ると「自分の庭は自分の意思で作りなさい」と睨み返された。私の園芸の方向が定まってきたのを察知した先生からの強烈的な指導だったのだろう。

普段の先生は、泥まみれの服を着て、古いネクタイをベルト代わり、どうみても百姓姿で、夜遅く何うと広大な花菖蒲園に裸電球を引き込み、

シャベルを持って力仕事をしており、一高、東大のエリートコースの人は思えない風体だった。

外出するときも服装には無頓着で、磨り減ったサンダル履き、赤い布のバッグにギッシリと何かを詰めて出かけていた。逗子では、山の下のシヤボテン社に居る弟の博さんが、「どこ行くの」と声をかけると「うん、ニュージーランド」といった具合で、飄々たるものだった。こんな姿でも、一度逢った人は、洋の東西を問わず魅了された。

千葉の三四郎合宿も、初期は地元園芸家が数多く集まっていたが、先生の風体から、先生も生産者ですかなどと聞かれて、「魚屋ですよ」と応えたものだ。「どこでやってんですか」には「築地の近くですよ」と笑っている。三宅さんが気付いて「この方は大変有名な研究家で、大博士なんですよ」ととりなしていたものだ。たしかに先生の研究所は晴海の水研だった。

その頃、ビタミンの研究で日本水産学会賞を受賞、カルテノイドの研究で博士号を受けていた。私には理解できなかったが、ごく微量の色素を計量するユニークな方法を開発し、世界の先駆的研究者として、後に農

林大臣賞を受賞している。

普段汚い服装もいとわれないが、明治神宮の参集殿での花菖蒲協会の新年会では、なんと先生は燕尾服姿だった。小柄で少し猫背の姿やお顔も昭和天皇に似ていて、これもお似合だった。

オシヤレといえ、ある時、これから東京に行くが渡したいものがあり、蒲田駅までお越しただけるかな、とのことで駅でお待ちしていると、金糸を織り込んだネクタイで、それを誉めると、ネクタイは〇〇宮妃殿下から拝領とのこと、何処か特別のところに掛かけですかと聞くと、イギリス大使館だけど、ダイアナ妃の夜会に呼ばれてね、と照れたような顔をほころばされた。お洒落をするとそれなりに立派な紳士だった。

花の話に戻すが、先生は良い花が開くと、書齋に花を持ち込み、飽きることなく鑑賞していた。槍の穂先のような花菖蒲の蕾が、折り紙を開くように、折り畳まれた花びらが展開するのを待っていた。舞扇を初めて見せてくれた時は、「二日目です。どうですか」と言っただけ、じつところらした目には、うっすら涙が光ったようだった。

最初に掲げた先生の文章は、次の言葉で締めくくられる。「こういう身勝手な言い草は別として、ハナショウブには徳がひとつある。それは各界の一流の方々のご面識を得るような成りゆきに、この花が自然に計ら

てくれるということである。ハナショウブ愛好家の方ならば私がかく申すことにご同感下さるにちがいない。」

先生の没後二十年、先生のテーマは、人間だったと思わずにいられない。

純粹園芸実践主義（ヒラオイズム）

…お母さん、見て見てここに綺麗な花が咲いているよ…

相模原市 清水 弘

育種家の追求するもの

この幼子の自然と込み上げてくる素直な心をそのまま持ち続け実践したのが平尾先生であり、没後二十年を経た今でも慕われつづける理由がここにある。私事で恐縮だが園芸は趣味、理系の本職を他に持ち、さらに花菖蒲育種という同じ土俵の上で園芸生活を送って来たという点で先生と私は重なる部分がある。二十回忌を迎えるに当たって、先生が何を悩みそれをどう解決していったかを私なりに考えてみた。

育種家は交配の動機とその結果を、楽しみながら分析しているものだが、実はこの意識はしばしば自己の内面にも向けられる。ご存知のように平尾先生はご自分が作られた美しい花を欲しげもなく周囲の人たちに分け与えていたが、「誰からも命令されてもないのに自然とそうしてしまうのは何故だろうか」と自問したに違いない。その答えが「花に対する感動を独りの心の奥底に仕舞い込むのはもったいない。この花と一緒に眺

めて共感しようではないか。」ということであつたと思う。人間がもともと持っているこの普遍的な本能を善として受け入れ、即、それを実践することでの疑問との折り合いをつけたのだ。思想的にみるとこれは明らかに禅の考え方であるし、心底から沸きあがってくるものに対する知性による理論武装でもある。一般に感動と呼ばれる精神的ショックは、平尾先生のようなエネルギーシユな人間にとつては、しばしば周囲を巻き込んだ活動へと発展して行く。それはあたかも水面に投じた小石が作る波紋のように、人から人へと伝わって行くものである。ご自分が実生した株が人伝が増えて行くのを楽しく思ったことだろう。ここに平尾先生の純粹園芸実践主義（ヒラオイズム）が成立したといえる。

「美しい花を散り行くままにして置くのはもったいない。品種改良という操作でその花のもつ美を最大限に引き出せないだろうか」という意味のことを云つたと聞く。これも明らかに平尾先生の後付け園芸思想であらう。創作的な性質をもっている人にとって美しいものを見た時に起る感動は、自分でも美しいものを創ってみたいという衝動につながって

行くものである。そこで造られた作品を見て別な作家が感動し新たな創作を始める。このような感動の連鎖を伴う育種は自ずと芸術性を帯びてくる。平尾先生の書簡を読み返してみると、自然科学と文化・芸術との狭間といえる花卉育種の中で、美とは何か、園芸文化とは何かを模索した痕跡を見つけ出すことができる。

園芸文化とネイティブプランツ

平尾先生がもともとわが国に自生し、既に江戸時代末には世界最高レベルに達していた花菖蒲を最初に育種対象としたことは実に幸運であった。花菖蒲は諸外国との植物交換材料として非常によいものであったし、やがては植物体のみならず写真や文化・歴史とかいった情報交換へと広がり、最終的には自らもイリスの世界大会に乗り出していった。現在、私は米国アイリス協会の審査員ということになっているが、実は平尾先生はフラワーコンテストを嫌っていた。いわゆる偏差値で優劣を決定するやり方である。米国方式に育種品を皆が同一基準で審査して行くというシステムは花の目覚しい園芸的進化をもたらし、短期間に装飾的に

優れた品種を形作って行く。一方、わが国の伝統的な花卉は本来、不整型なものを含む極めて多様なものであるし、地域別に異なった基準で選抜された系統が数多く存在している。いわゆるパンドミックとエンデミックとの問題は日本人育種家にとって最大の関心事だ。この対立を「野生種に美の原型がある。」という原点に立ち返るということを決着をつけた。平尾先生は古典芸能にも通じ、西洋花卉にはない花菖蒲の花芸(花形の経時的变化)を能舞に喩えた。同じ能舞台と使用される能面の中で中間表情をもつといわれる一群は、すべての表情を包含していて観客に見せる面の角度によってさまざまな喜怒哀楽を示す。恐らくこの能面の持つている美へのポテンシャルティを野生種の花が持っている育種上の可能性と重ね合わせた結果、この原点主義に帰結したものと考えられる。

園芸ヒューマニズム

先生は園芸の初心者にはとても分かりやすく、そしてその道のプロには手厳しい一面があったが、根本的には命というものを平等に扱った。花菖蒲の例会で、ある役員が農薬業

者を連れてきて除草剤の説明をさせたことがある。その時、平尾先生は非常にいやな顔をされた。すべての生命を根絶する薬剤に拒否反応を示されたのであるが、除草剤は花菖蒲園を経営する実務家にとってはある種の救いでもある。この方面ではいくら平尾先生でも互いに矛盾する問題を解決出来なかった。経済性を考慮しない花の伝道師であったからである。「花の美しさとは花自体にあるのではなく私たちの心の中にある。」平尾先生は魂の真底から沸きあがってくる自分の気持ちを大切にし、それを他者にも働きかけた。

人生においてたった一度の出会いでもその人に大きな影響を与える人がいる。そのような人は人間的な膨らみをもった人なのだろう。富士山を眺めると四季折々にいろいろな表情を現し、人はそれぞれ勝手な捉え方をするが、私が表題としたものもそのようなものである。しかし理屈は兎も角として、確かなのは『お母さん、見て見てここに綺麗な花が咲いているよ』この幼子の純粹な心を持ち続け実践したのが平尾先生であり、日本花菖蒲協会のアイデンティティとなっていることである。

育種家へのメッセージ

我われが未知の花を追いかめる活動には「美」を追求する行き方と「奇」を追求する行き方があると思います。もともとこの二つの方向は必ずしもはつきり分かれているものではなく、どちらつかずの場合もあります。菖翁の培養録にも「年寄りの片意地にして異形の花を集め珍花奇芳と秘想して」とありますが、菖翁が八重咲の花の作出に苦心の結果、宇宙や霓裳羽衣を作り出したのを世人はあざけたのかもしれない。今日でも愛知の輝などはむしろ存在しない方がよいという人もあります。人の好みはさまざまですから、貴公もご自身が「美」であり「新」であるとお考えの方向に進まれるのがよいと思います。(平尾先生から清水宛に出された書簡の一部抜粋です。)